3 手取川扇状地の形成と共生・共存への過程検証

吉田 洋
YOSHIDA Hiroshi
白山手取川ジオパーク 公認観光ガイド

河川の度重なる氾濫でできた扇状地に住み続けてきた人々は、その地形や土壌の特性を生かし、適地適作農業の伝承と創意・工夫を重ねることで、世代を継承してきた。石川県の手取川扇状地を例に扇状地での生活や歴史について紹介していただいた。

起　My family history

大正11（1922）年2月に生まれた筆者の実母「森（旧姓:山田）花子」は、旧制高等小学校1年の時に、石川県の災害史に大きく刻まれた昭和9（1934）年7月の手取川大水害に遭遇しており、生徒を代表して、開局間もないNHK金沢放送局のラジオ生放送で自作の文章を朗読したらしい。生涯を通じての大きな思い出であったようで、晩年でもその全編をおおよそ暗唱していて、時々孫や曾孫にも満足そうに話し聴かせておりました。

母の実家は、嫁ぎ先の日本海に近い今の能美根上駅付近から、手取川沿いに7km程東方の上清水という小集落でした。物心ついた頃から事あるごとに家族こぞって帰省するのが、大きな家族行事でした。

特に夏休み期の7～8月には、子供たちだけでも軽装で訪れ、集落内の神社や隣家の屋敷林でセミ捕りをしたり、歩いて数分の手取川に家族で出かけ、その河道に形成される大小の天然プール状の「た（≒溜）まり」から、その年々での最適なものを見定め、冷水での水浴びに興じたりするのが極上の楽しみでした。

このた（≒溜）まりの澄んだ緑青色の水中をのぞくと、足下には丸い河原石と涼しげに泳ぐ天然のアユが眺められ、身近に自然と親しめる格好の避暑空間でした。

しかし、こののどかな印象の手取川ですが、梅雨時や秋の台風シーズンの降雨期には急激に水かさが増し、薄茶色の泥水を大量に流す「荒々しい川」に一変しました。

手取川の流域全体を急襲した昭和9（1934）年の手取川大水害は、3つの悪条件が一度に重なって大惨事をもたらしました。

① 白山連峰に冬季に降り積もった残雪が多い年だった。
② 梅雨期終盤の集中豪雨が、特に7月10日前後にかけて襲った。
③ フェーン現象を伴う高い温度の南風にもあおられて、融雪と土石流が重なった。

この最悪の事態に起因した大増水は、明治29（1896）年以来の大洪水となり、労苦を重ねての復旧工事完成も一夜にして荒土に逆戻りしてしまったようでした。

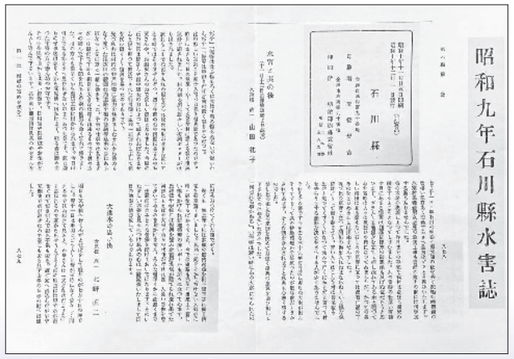

写真1　実母が遺した作文「水害と其の後」

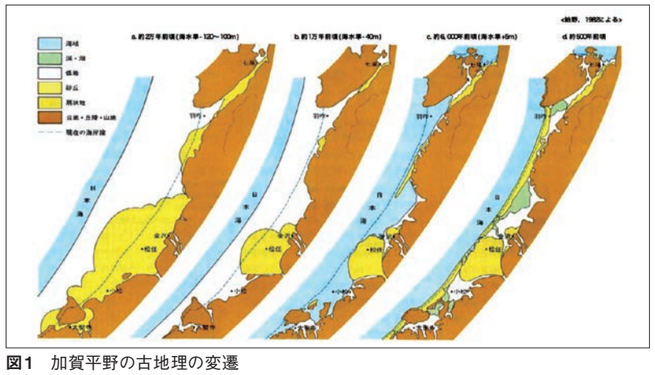

図1　加賀平野の古地理の変遷

空前絶後の大洪水により荒野と化した惨状は、実母の当時の作文に目を通していただければ、ひしひしと伝わってくるに違いありません。

《白山手取川ジオパークの世界認定》

しかし、この「荒ぶる手取川」も白山市の全域が「白山手取川ジオパーク」となり、令和5（2023）年5月には、日本で10番目のユネスコ世界ジオパークに認定されました。

その全体テーマは『山-川-海そして雪、いのちを育む「水の旅」』であり、「水の旅」と一対の「石の旅」についても、大地を理解するキーワードとして並列提起されています。

承　手取川の流路の歴史的変遷と（典型的な）扇状地（地形）の形成

手取川の生成以降、自然現象としての数えきれない洪水や氾濫がなすがままに繰り返され、その積み重ねが『手取川扇状地』を形成しました。

手取川の下流域は、鶴来付近を扇頂部とする典型的な扇状地地形を現出していますが、その形成が始まったのは今から約200万年前頃で、その後は扇状地を海が覆う海進時代と海岸線が後退する海退時代が幾度も繰り返され、やがて現在のような加賀平野の地形となったのは、およそ2万年前から縄文時代後期（約4,000～3,000年前）頃といわれています。

白山手取川ジオパークがユネスコ世界ジオパークに認定される過程で、ユネスコから派遣された審査員は獅子吼高原から眺望できる、際立って美しい手取川扇状地の地形や景観に強い感銘を受けたそうです。

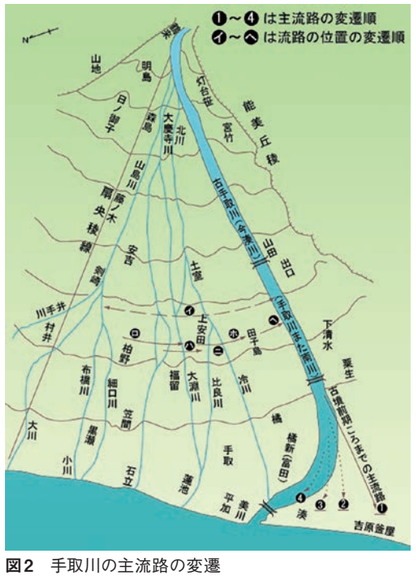

図2　手取川の主流路の変遷

手取川は、氾濫によってできた自然堤防などの「高みの土地」を避けて、より低きを探るように流れ、そうした低地部や海中での堆積作用による「一巡りする周期的な流路変遷」を繰り返して、およそ110～120度で拡がる扇状地を形成しました。

奈良時代頃でも水流は赴くままに流れ「比楽河（ひらかがわ）」と呼ばれていたそうです。当時の手取川本流は、山島川（現山島用水）の南川水系だったろうとされ、

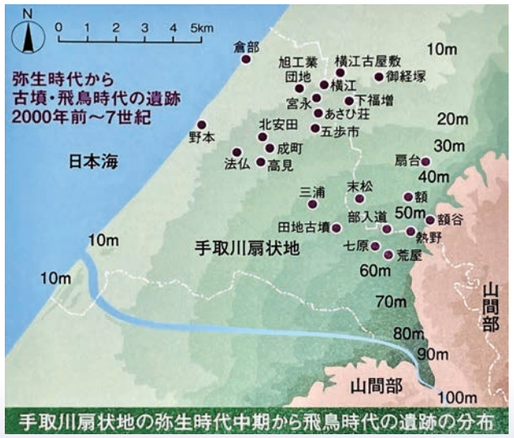

図3　手取川扇状地の弥生時代中期から飛鳥時代の遺跡

図4　江戸時代の手取川扇状地の地図

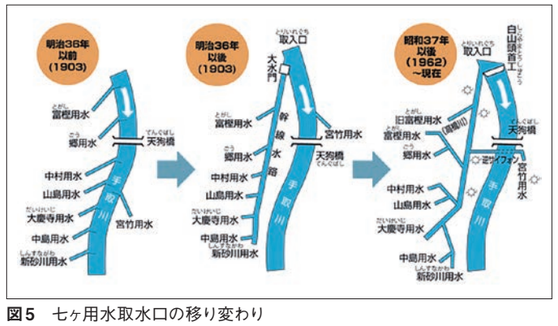

図5　七ヶ用水取水口の移り変わり

日本海の海退進行につれて左岸側へ漸移し、現在の手取川へと主流路を変えていきます。

また、手取川扇状地の北東寄りの半分位からは、奈良時代以前の遺跡や遺構が多く発見されますが、南西寄りの半分では発掘実績はなく、ここ1,000年位の間で定住や農耕が進んでいったようです。

それまでの手取川扇状地のほとんどが水流の赴くままの氾濫原や荒地だった様子は、30～40年前に地元で開催された司馬遼太郎氏の講演会でも、手取川扇状地の開墾時期に言及され、「鉄の農具」が庶民にも普及した室町後期から戦国時代頃に、この地の開墾が急速に進んだのだろうと発言されていました。

転　農地としての手取川扇状地利用の闘いと工夫

このように鉄製の農具の一般農民への普及を経て手取川扇状地の農地としての活用が進捗し始めたようです。

さて手取川扇状地では、江戸時代の末期から明治時代にかけて、「七ヶ用水」や「宮竹用水」の改良事業で、ある程度安定した農業用水の供給が進みます。

加えて、明治時代の後期から大正時代にかけては、大規模な耕地整理が進められ、やがて県下一の穀倉地帯といわれるまでになりました。

戦後には、石川県政の命運をかけた一大プロジェクト「手取川総合開発事業」で「手取川ダム」が完成し、より安定した産業基盤と生活基盤が提供されるに至りました。

《舟場島町などの「島集落」立地》

さて、この手取川扇状地の扇央部～扇端部で特に紹介したいのは、川北町地内の手取川の本流沿い集落「舟場島町」です。そこの「船玉神社」にある由緒書き「舟場島の由来」には「本町の歴史は300年余であるが、その間に450回以上の出水・洪水の被害を蒙っている」と記されています。

《「加賀丸いも」特産化と手取川の大氾濫》

さて、手取川扇状地での農業用水などの灌漑設備が年々整備されていったことで、多様な地場産品・特産品が栽培・育成されてきました。その主なものは、図6で一覧できます。

筆者が生まれた能美市（旧根上町）の一番の特産品は「加賀丸いも」です。現在では隣接する小松市や白山市でも、特産地化が進捗していますが、そのルーツは旧根上町の五間堂地区です。

加賀丸いもは、大正時代に地元の2名が三重県へのお伊勢参りの帰りに「伊勢いも」を持ち帰って栽培を試みたのが始まりで、当時はデコボコした形でしたが、昭和9（1934）年の手取川の大水害によって、粘土質の田んぼに川砂が混ざり込んで土壌が砂壌土に変質した後、次第に丸い芋が育つようになり、洪水が丸いも栽培適地を生んだようです。

写真2　船玉神社内にある「舟場島の由来」

また、手取川扇状地一帯での清澄で豊富な伏流水や物流ターミナルに近い立地条件への評価から「電子部品産業」「食品・飲料産業」「精密機械産業」「レジャー産業」「建設骨材産業」「大型商業施設」等々が数多く進出しています。

図6　手取川扇状地での地域特産品

結　石川県政のテーマ「幸福度日本一」実現へのモデルエリアとして

石川県では、石川の個性・魅力・基盤を継承し、さらに発展させつつ、進むべき方向性を示す新たな総合計画として「石川県成長戦略」を令和5（2023）年9月に策定しました。

計画期間は、令和5（2023）年度から令和14（2032）年度までの10年間で、その基本目標を『幸福度日本一に向けた石川の未来の創造～住みやすく、働きやすい、活力あふれる石川県の実現～』としています。

『全ての県民が、夢と希望を胸に、未来に向かってチャレンジでき、誰一人取り残されることなく、一人一人が真の幸せを実感しながら、健やかに安心して暮らすことのできる「幸福度日本一の石川県」を目指す』とし、令和6（2024）年元日に起きた「能登半島地震」後の震災復興においても、この基本目標は、有効に機能していくでしょう。

一方で手取川扇状地エリアを構成する連坦市町群（野々市市、白山市、能美郡川北町、能美市、金沢市、小松市）は、毎年6月に東洋経済新報社が公表する「住みよさランキング」において、毎年のように上位にランクインしています。

手取川扇状地エリア一帯での豊富な伏流水、安定した基礎地盤（土砂災害、地震、水害などに強い）、手取川ダム建設後の災害リスクの低下や電気や水源の安定確保などがその大きな要因のようです。

運命共同体としての手取川扇状地エリアでの各種連携戦略や共同施策の推進（「北陸新幹線敦賀延伸に伴う観光連携」「広域総合病院」「広域消防本部」など）が進んでいます。

手取川扇状地の住民たちの表情も一様に穏やかで、心地よい暮らしの日々を過ごしている実感を率直に受け取れるのです。

「住みよさランキング」で、常に上位にランクされる手取川扇状地エリアは、石川県がめざす「幸福度日本一」実現への最も重要なモデルエリアであろうし、そのことを自覚しつつ、更なる住みよい地域形成に邁進していくべきでありましょう。

＜参考資料＞

1)『昭和九年石川縣水害誌』石川縣
2)『図説 白山市の歴史と文化』白山市
3)『白山検定 参考書』白山市観光連盟
4)『Consultant 302』『急流河川の洪水を軽減する「手取川霞堤」』田丸真菜
5)『人々のくらしを支えてきた用水の成り立ち』
　北陸農政局 手取川流域農業水利事業所
6)『枝権兵衛と農業用水の歴史』北陸農政局 手取川流域農業水利事業所
7)『URBAN KUBOTA No.31』特集：北陸の丘陵と平野（クボタPR誌）
8)『国営かんがい排水事業 手取川流域地区』農林水産省 北陸農政局 手取川流域農業水利事業所
9) Press Release『東洋経済「住みよさランキング2020」の結果』東洋経済新報社 2020年6月17日
10)『石川県成長戦略』～幸福度日本一の石川県を目指して～ 2023－2032 令和5年9月

＜取材協力・資料提供＞

1) 白山手取川ジオパーク推進協議会
2) 手取川宮竹用水土地改良区事務所

＜図・写真提供＞

写真1　参考資料1）より引用、一部加筆修正
写真2　吉田 洋
図1　株式会社クボタ発行　アーバンクボタ31号 特集：「北陸の丘陵と平野」5加賀平野　図5-13 加賀平野（七尾以南）の古地理の変遷＜紹野,1982による＞
図2　国土交通省HP 「手取川 日本の川 北陸の一級河川」『手取川の歴史』 流路変遷の年代図 より
図3　参考資料2）より引用
図4　参考資料5）より引用
図5　水土里ネット 七ヶ用水 手取川七ヶ用水土地改良区 七ヶ用水の概要「七ヶ用水取水口の移り変わり」より
図6　参考資料8）より引用